はじめに

書名の「任運騰々」は、吉田嗣義・任運社会長が敬愛した僧良寛の愛された言葉です。良寛和尚が生涯をかけて追求した、人間としての理想の生き方でもあります。

利用者本位の旗じるしを掲げ、福祉のあり方を世に問い続けてきた吉田会長はご自身で作られた施設の理想の姿として、僧良寛の言葉をいただき、特別養護老人ホームに「任運荘」、身体障害者療護施設に「騰々舎」の名をつけられました。

人間は運命的な存在だが、運命に従いつつも、なお高らかに生きて行こうではないかという願いを込めて…。

僧良寛がそうであったように、七十八歳で亡くなられた吉田会長のご生涯も、またこの言葉どおりの生き方ではなかったと思われます。

ここに収録した一五八編の「エッセー」は、一九八〇年五月から亡くなられる直前の一九九七年六月まで、吉田会長が地元紙の大分合同新聞夕刊「灯」欄に月一回の割で寄稿されたものです。福祉、教育、文化、政治、親子など極めて多岐にわたってお

りますが、青年教育や福祉事業に熱い情熱を燃やし続けた吉田会長の、人を慈しみ愛するという深い思いと主張が凝集されています。

本の出版を思い立った理由のひとつには吉田会長が亡くなられた後、多くの方々からお悔やみの言葉とともに「もう一度、〝灯〟に書かれたものを読み直したい」、「これまで書かれたものを一冊の本にして」といった声をいただいたこともあります。

吉田会長が折々に書かれたものを今一度読み返し、私たちに何を伝えようとしたのか、一編一編に込められた熱い思いをお汲み取りいただければ幸です。

本づくりに深いご理解をいただきました大分合同新聞社と、快く印刷、製本作業をお引き受け下さいました三和印刷出版㈱の田北久丸社長に心からお礼申し上げます。

一九九七年十二月

任運社出版委員会